紹　介

中村直勝博士古稀記念会編
中村直勝博士蒐集古文書

本書は中村直勝博士の古稀の寿を記念すべく、博士の蒐集された古文書三五五通を刻印し、詳細な解説を附して上梓されたものである。私も、石田善人氏を手伝つて、その解読に微力を供した一人としてここに紹介させていただく。文書内容は平安時代五通・鎌倉時代四二通・南北朝時代三〇通余・室町戦国時代六〇通余、以下江戸時代のものである。文書内容から云えば、院宣・太政官符案・東寺長者宣・将軍家御教書・東大寺政所下文・将軍家政所下文・東大寺奉行所奉書・室町幕府奉行人連署奉書等の公文書、寄進状・軍忠状・著到状・請文・起請文・願文等で注目すべきものがあり、伊賀国黒田庄・美濃国大井庄・山城国拝師庄・丹波国大山庄などすでに著名な荘園に関するものや、長講堂領・法金剛院領などの関係文書で、いくつかの新史料を含んでいる。しかし博士の古文書に対する魅力の存する分野がにじみ出て、とくに消息文が多い。花園・光厳・後光厳・後小松・後柏原・後奈良・正親町・後陽成・後西・明正・霊元・孝明等の天皇の宸翰御消息は圧巻であり、造東大寺大勧進栄西・東大寺聖守・足利義満・三条西実隆・山科言継・近衛信尹・宇喜多秀家・金地院崇伝等の消息等も貴重であり、津田宗及・細川幽斎・古田織部・織田有楽斎・本阿弥光悦・小堀遠州・千宗旦・千宗左・金森宗和等の茶人、春屋宗園・玉室宗珀・江月宗玩・沢庵宗彭・一絲文守・翠巌宗珉・伝外宗左等、大徳寺を主とする禅僧の書状墨跡がその数において多い。とくに金森宗和の書状は、江戸初期の芸術史史料として注目すべきものが多い。

私達が手伝ったのは、七月中旬頃から約一カ月の間であつたが、とくに茶人の消息文は難解で、鳩首検討したが結局文殊の智慧が出なかつたものも多々あつた。この種のもの十数点は、赤松俊秀・桜井景雄・林屋辰三郎の諸先生方に読んでもらおうとしたところ、一言のもとに一審さしもどし、原稿を作れと云われた時は、暑気も加わつて、古文書の魅力どころか、古文書恐怖症にとりつかれた形だつた。一一一号文書として収められている三条西実隆書状に至つては、どこからどう連がつてゆくのか、まさにクイズものであり、博士の「古文書の魅力」中の「誰も解けない暗号文字を読解した者のみの味へる快感。それが古文書がすらすらと読めた時の甘味である。」との心境とは、かなりへだたつた苦行であつた。このような書状を床間にかけて生活に潤ひをもたせるためには、まずわれわれの僅かな蔵書ではあるが、その書物の下に埋もれている床間を解放してやることこそ先決であると、ペンを擱いて話したこともあつた。しかし、そのような中にあつて、古文書に対する歴史研究者のあるべき厳しい態度をたたき込まれたのであつたと、今、この書と共に師の恩につつまれている。（A5判　コロタイプ三十二葉・本文・解説共三九九頁　中村直勝博士古稀記念会刊　なお頒布希望の向には、京都大学文学部国史研究室にて、頒価一、五〇〇円にて取扱中）　（三浦圭一）

水口町志編纂委員会編
水　口　町　志

東海道五十三次の宿駅として著名な滋賀県甲賀郡水口町の、町制六十周年を記念して企

画された本書は、関係各位の前後六年にわたる苦心が見事に結実して、このほど上梓された。柴田実先生を監修者に、京都大学国史研究室の石田善人・朝尾直弘・佐々木隆爾、郷土の篤学者馬場芳太郎・細野正長以上六氏によつて編纂された本書をひもといて、まずその内容――構成のユニークさに一驚させられる。上巻の序篇は自然環境を概観し、本篇で通史をとりあげるのは通例ながら、下巻外篇は水口今昔と題して水口の由来よりはじめてさまざまの伝承や郷土産業を三二項にわたつて興味深く展開、社寺篇は二六社七八寺その他について由緒・現状等を精説、人物篇また実に一七七名の多数にわたり、水口藩主や文化人について詳しく解説、以上三篇は馬場・細野両氏の苦心になり、さすが郷土にあつて長年の辛苦を偲ばせるに十分である。下巻最後は史料篇で、以上上下二巻六篇よりなる本書は、通史のいわば補註的部分をそれぞれ別篇とすることで、本篇は「町史」として極めてスッキリした形で登場させる。しかも本篇の内容また、ありきたりの通史概説の類ではない。第一章古代の水口は、伝承の世界を埋蔵文化よりみた古代水口より前におき、大化改新と近江宮、平安期の甲賀、で古代を片付けている。一片の土器片や一つの古墳から当該市町村の原始・古代史を拡大する如き、針小棒大の史料操作を本書はとらない。中世は甲賀武士の活躍と題して、甲賀三郎の伝説よりはじめて山中文書と蒲生文書を縦横に駆使して、柏木厨代官山中氏、儀俄荘官儀俄氏の活躍を中心に展開する。山中文書の広汎な利用は管見の限り本書を初めとするが、それだけに随処に新知見が紹介される。近世に入れば、まず水口宿と題して、水口宿の成立から変遷、宿の機構、宿場町の生活が、豊富な史料を駆使して詳説され、ついで助郷の村々と題して、旧水口宿周辺の諸村（近時の町村合併で、旧伴谷村、柏木村、水口町、貴生川町が合併、さらに今郷、嶮峨、和野部落を加えた）の歴史が、助郷に焦点を合せながら概観され、以上の水口宿と助郷の村々を一体として叙述することで、近世水口宿のすべてが、見事に描き出されている。さらに幕藩体制の崩壊、近代水口町の成立、社会経済の発展、二度の大戦と町村、現代の水口と続けて、宿駅水口の現代に至る歩みが追究されている。以上の撫雑な紹介でもおわかりいただけるかと思うが、本篇は、水口町の歴史的特色に則した通史として描かれ、それだけに、学問的に極めて貴重な業績といえよう。こうした方法こそが、一地方史が、広く学界にその存在を主張し得る方法であることはいうまでもない。最後に史料篇は、本篇中の主要史料である蒲生文書・山中文書・町役場所蔵文書・区有文書を収める。中でも山中文書は、ここに初めて印行されたのであるが、残念乍ら全四六七通中三〇〇通に留まっている。残りの部分も、何らかの形で印行されんことを期待する次第である。（下巻A5六三〇頁　昭和三四年九月、上巻　六五四頁　地図一葉　昭和三五年二月　水口町志編纂委員会発行　非売品）

（熱田公）

西宮市史編纂委員会編
西宮市史　第二巻

先年刊行された第一巻にひきつづいて、西宮市史第二巻が上梓された。第一巻は市域の概況と自然環境・地理的構造を述べ、歴史編では古代より中世に到る西宮の発展過程を明らかにされたが、本巻では、第三巻に当る近・現代の西宮につながる近世西宮について